牧野虎次研究覚書

―監獄教誨師時代を中心にして―

室田保夫

はじめに

牧野虎次はしばしば、同志社の生んだキリスト教社会事業家の一人に挙げられてきた。同志社卒業後、北海道での監獄教誨事業、大正期には内務省嘱託、南満州鉄道会社社会課、大阪府嘱託、昭和期には家庭学校の校長等、社会事業の役職を歴任した。この間、土佐教会伝道師、京都四条教会牧師や『基督教世界』の編集といったキリスト教関係の業務にも就き、昭和十年代、同志社に招聘され、戦時中に総長を務めた。社会事業、キリスト教界、教育関係等に多大の業績を残した。戦後も京都府教育委員長、ホノルル・マキキ聖城教会やシカゴ基督教会牧師等の職に就き、「これほど多彩な人生行路に成功した典型的基督教徒は多くあるまい」[1]と称される程、変化に富んだ人生であった。こうした業績がありながら、これまで牧野に関して研究が充分されてこなかった。

牧野は一八九五（明治二八）年一一月、教誨師たちの連袂辞職で北海道を離れ、翌年一月一四日、十勝分監での教誨師生活を振り返り、京都同志社から次の様な書簡を在米の留岡に送っている。

伝道者としては、所謂説法計りにては不十分なり。人々のHow to liveの問題に直接の影響なくんば到底膠柱守株の迂儒たるに過ぎずとは、此れ小生が十ケ月間監獄の中にありて人生の堕落史を研究したる末の発明に御座候。故に将来の伝道者は、少くとも身自ら一代の師表を以て任じ得らるゝ者に非んば、ダメなりと悟り申し候。かゝれば、モツト活動多くして活気多き所謂活きた人間でなくては、迚も宗教家にはなられぬ事と、深く自ら警めをり候。(2)

このように牧野は、短期間であったが監獄教誨師であった経験の重要性を書簡に認めている。囚徒と接しながら「人々のHow to liveの問題」に関われる様な「宗教家」になること等、多くの大切なことを学んだ。かかる経験あればこそ、その後の米国イェール大学留学もあり、帰国してからの牧師や操觚者としての道、あるいは社会事業家、教育への関わり等々、教誨師の経験は彼の人生の原点であったと思われる。この牧野はいかなる人生を渉っていったのか。さしあたり牧野についての研究史をふり返っておくことにしよう。

牧野の生前中であるが、生江孝之は『日本基督教社会事業史』（教文館、一九三一）の六章第二節「監獄改良事業と基督教徒」の中で、「北海道バンド」と名付けたメンバーの一人として簡単に紹介している。戦後においても牧野個人に関する研究は管見の限り非常に少ない。筆者は『同志社時報』七二号（一九八二年三月）で牧野の生涯を簡単に紹介したことがある。鏑木路易は「『北海道バンド』論」（『同志社談叢』二〇号、二〇〇〇）で牧野を含めバンドの各メンバーにつき説明しているが、彼の北海道時代の事績や思想については詳しく言及されていない。一方、山本啓太郎は『社会福祉の先駆者たち』（筒井書房、二〇〇四）で「牧野虎次―方面委員界の教師として」として、大阪府嘱託時代の牧野を取り上げ、また手島仁は「黒澤長吉と二人の同志社総長―湯浅八

郎と牧野虎次」（『群馬県立歴史博物館紀要』三〇号、二〇〇九）で牧野の黒澤長吉宛書簡を紹介している。本井康博は『新島襄の教え子たち（ジャンル別）』（同朋舎、二〇一九）で「北海道バンド」の一人として取り上げている（四一三～四二一頁）。一方、北海道行刑史やキリスト教史において、キリスト教監獄改良の一員として彼の名前は原胤昭や留岡幸助、大井上輝前らと共に取り上げられてきた。[3] しかし牧野個人に焦点を絞った研究、とりわけ教誨師としてあった北海道時代の牧野を論じた研究は皆無の状況と言わざるを得ない。[4]

本稿は彼の思想形成に重要な同志社時代を考察し、卒業後の一八九五年二月に渡北し北海道集治監十勝分監（同年四月開庁）の教誨師に就き、そこで教誨師として働き一一月末に連袂辞職する僅か約一〇カ月の教誨師時代を中心にみることにある。上述したように、体験は短期間であったが、牧野のその後の人生に影響を与えた重要な意味を持っている。そのためには先ず同志社に学び、如何なる決意のもとで教誨師職に就いたのかを明らかにしていきたい。かかる問題意識をもって当時の論文や消息記事等を渉猟し、彼の教誨師像、思想、すなわち「北海道バンド」の一員としての牧野像を描くことを目的としている。資料として『同志社文学』（この雑誌は名称変更が何回かある）、同情会の機関誌『教誨叢書』や『獄事叢書』、行刑関係の『監獄協会雑誌』や『監獄雑誌』、『基督教新聞』、そして家庭学校の機関誌『人道』等の紙誌、さらに『留岡幸助日記』一巻（矯正協会、一九七九）、加えて北海道集治監関係の資料、関係人物の研究等を主に利用していく。[5] 彼の生涯を論じるに際しては牧野虎次『牧野寿子小伝』（一九二七）や彼の自叙伝、藪崎吉太郎編『牧野虎次先生自叙伝』（一九五五）、『針の穴から』（牧野虎次先生米寿記念会、一九五八）等も参考にする。

一、生誕、朝陽学校、そして同志社へ

（一）出自から同志社入学まで

牧野虎次は一八七一（明治四）年七月三日、旧西大路藩（滋賀県蒲生郡西大路村）で、父・安良、母・寿子の二男として生を享けた。安良は先妻を失い、三六歳の時に寿子と結婚する。ここで牧野家の歴史を若干述べておこう。滋賀県日野の蒲生家の家臣牧野長門守の家筋を彼の祖父たる元策翁が継いだ。元策は「篤学多芸にして有為の材なりき」[6]とあり、京都で医学を学び、傍ら黄檗宗の華頂和尚から禅を学び、詩文に長け茶道、活花等の嗜みもある文化人であった。水口藩加藤候や西大路藩市橋候等に出入りし、交友多く俳名「和月」の雅号で多くの碑文もあるという。元策、律子（蒲生郡中山村出身）の二人には四男一女（一女、二男は夭折）があり、長男と弟の安良（幼名豊助）が医業を継いだ。安良は一八三一（天保二）年生まれで西大路藩市橋候の侍医で藩校日新館の儒学講師も勤め、八一（明治一四）年、虎次九歳一〇カ月の時、五〇歳で亡くなる。寿子は義母律子に対し「深く其性格に憧憬し、其気風に感化せられたり。寿子の態度にして斯の如きものあり、律子もまた寿子に対し相応の共鳴を有し、姑と嫁との間に美はしき情意の投合を見たりしなり」[7]と記されている。しかし夫安良が亡くなり、母子家庭として家計を切り盛りしていった。当時、牧野には兄一人、姉二人と弟二人がいた。牧野は母のことを「愛児の為には、辛いことも、苦しいことも、何もかも忘れ、果は己が身さえ忘れ、只だ一図に所生児の成人を祈る親心こそ、神聖なる神心に通ずるでないか」[8]と述懐している。

こうして牧野は少年時代から母寿子に育てられることとなる。牧野は同志社と朝陽学校の二つの母校があると記す。すなわちその一つ朝陽学校（現日野町立西大路小学校）とは彼の出た小学校であり、一八七三（明治六）

年七月三日に創設された。六歳の時、七七（明治一〇）年に入学する。そこは市橋候の御殿を中心に新築のつぎたしが教場となった。崖下の日野川を隔てて旧城址、法殿ケ岳が望まれる景勝の地であり、校長曽我部信雄と岩田勇三郎教師を忘れ難い恩師であったと回顧している。牧野はその時代が懐かしく「朝陽学人」という号を終生、使用しており、朝陽という言葉には彼にとって特段の愛着、思い入れがあるようだ。

牧野は卒業時、一四歳の春に文部省から褒美（帙入りの孝経）を貰った。一八八五（明治一八）年九月に大阪の大学分校（後の第三高等中学校）に入学する。同級生に幣原喜重郎、伊沢多喜男、下岡忠治、落合謙太郎、姉崎正治、荒木和一ら錚々たる人物がいた。しかし牧野は常に病気がちで、その上腸チフスに罹り一六歳の時、寄宿舎を追放されてしまう。幸い病気も回復し、八八年九月、同志社英学校に入学することとなる。入学の経緯については、病気回復後「近くの京都なら、大阪と違い水も良いからとて、翌年の秋、同郷の友人を頼って私は相国寺の藪蔭、塔の段に下宿、ふと同志社英学校の生徒募集広告を見つけた。公会堂一杯の受験生であったが、私は幸い合格者百弐十名に伍し、A組に編入せられた[9]」と記している。

（二）同志社英学校時代

①「学生生活」をめぐって

周知のように、同志社英学校は新島襄によって、一八七五（明治八）年一一月二九日、古都京都に創設された私学である。翌年に熊本洋学校の生徒たち、いわゆる「熊本バンド」を迎え活気を呈し、ラーネッドやデイヴィスらの宣教師や優秀な教授陣を揃え、順調に発展していく。同志社の学生として入学した牧野は当然、新島の影響を受けた。その頃、新島は明治十年代中頃より大学設立運動に奔走し、八八（明治二一）年一一月に「同志社

大学設立の旨意[10]」を公にする。その中で「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非す、実に一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず、是等の人民ハ一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人ハ即ち此の一国の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す、吾人目的とする所実に斯くの如し」と設立の意図を披瀝する。まさにキリスト教主義による「良心教育」という特徴があった。その特徴は東の慶應義塾の創設者福沢諭吉としばしば対比して論じられることがある[11]。牧野は後年になって幾度か新島と同志社教育について言及している。その新島の謦咳に接し、あるいは思想的影響を受けた学生から多くの社会事業家を輩出したのも同志社の特徴である。たとえば牧野は「新島先生と社会事業精神（其一）[12]」という講演の中で、新島の思想や教育と社会事業との関係を論じている。

牧野は同志社に入学して間もなく新島に会っている。というのは牧野の伯父（田中信惇）は西大路藩市橋候の右筆を勤めていた。それ故に安中藩主板倉侯の右筆新島民治と知遇の間柄であった。伯父は「俺は新島さんに頼まれて七五三太坊（しめたぼう）を寺子屋に伴れて行ってあげたことがある」（『針の穴から』二二頁）と聞かされており、牧野は初対面時にそのことを言うと、新島はよく覚えており伯父の近況等を尋ねたとのことであった。そして新島は新入少年に優しく接してくれたことを今は忘れることが出来ないと述懐している。

牧野は同志社に入学し、三カ月後に将来の思想的基盤ともなるキリスト教の洗礼を受ける。生涯をキリスト者として生きた人にとって、「回心」が人生に忘れ難いものとして記憶に残るが、牧野も後世まで脳裏に刻み込まれている。それは同志社の入学式の時であり、柏木義円の祈り、すなわち「天父を呼ぶ衷情の叫聲」に胸打たれた。というのは「父を喪ひ人生行路難を味ひかけた」牧野にとって、「天の父」という響きに心が震えたからだと。そして「自分はこの時初めて霊界の実在に触れ、自から『義しき者の祈りは力あるもの』なるを悟り得た」、こ

れが「生涯に一転向を与ふる動機となるに至つた」[13]と回心の動機を述懐している。かくて、牧野は一八八七（明治二〇）年十二月一八日、同志社教会で大塚素らと共に金森通倫より洗礼を受けたのである。

ところで、牧野の同志社での同窓には、西村清雄、山本徳尚、大塚素、上には留岡幸助、吉田清太郎、下に水崎基一、山室軍平らがおり、新島や、ラーネッド、柏木義円らの良き師、良き先輩、友人に恵まれた学窓生活であった。しかし、不幸にも尊崇する新島は、一八九〇年一月、大学設立寄金募集奔走の途、神奈川県大磯で天に召される。新島の死は当時学んでいた学生にとっても「霊性の覚醒」を促すものであった。新島の「活ける力ある基督教主義」（「同志社大学設立の旨意」）の理念は他の学窓と共に、若き牧野の中にも浸透していたと考えてよい。[14]新島の葬送には当時の学生が若王子まで棺を担いだという言い伝えがあり、牧野もその一員であった。[15]既述したように、牧野は同志社にて多くの友人に恵まれたが、とりわけ大塚素との出会いを感謝している。

その大塚は一九二〇（大正九）年八月四日、「満州」で亡くなる。留岡の家庭学校の機関誌『人道』は「大塚素追悼号」の特集を組んだ。留岡や有馬四郎助、後藤新平らが弔文を寄せている。牧野も「大塚素を悼む」[16]という長い弔文を執筆する。大塚は牧野より三歳年長であり、牧野は兄が弟に接するように感化を与えてくれ、「君によりて友情の何物たるを経験し得た」と述べ、「君の如き同志の友を得たことは母校が僕に与へて呉れた最高、最貴の賜物」と感謝を吐露している。二人は同級生として入学し、同じ様な境遇、すなわち大塚は幼にして父母を失い弟妹三人の扶助を負い、また牧野も父を失いその後、老母と二人の弟の世話をするという家庭環境であった。大塚は弟妹のため、お金の節約を心掛け典型的な苦学生として過ごしていた。牧野は「この弟妹に対する友愛の情こそ、同志社卒業匆々、君を駆りて北海の僻陬に遣り、鉄窓の下に呻吟せる天下無告の徒を慰藉啓発すべき任務に当らしめたものではなかつたか」と友を讃えている。

また、牧野は北海道バンドの一人、水崎基一とも親しい間柄であった。学生時代の思い出を次のように回顧している。この一説も良き青春時代のものである。

君は破れた袴で、僕はつぎ縫ひの筒袖で、共に御苑内を散歩し乍ら、維新当時の志士の往来したと思はれる辺りで、慷慨談を高らかに語り合うたことは、つい此間の様に思はれる。君が何かの引合に櫻洲山人を出されると、僕は負けずに東方齋を語った。中井知事訪問の時は君は案内役であったが、荒尾先生の門を敲く時は僕が先達をつとめた。君は興至らば詩吟をやるのが得意であつたが、僕には結局讃美歌を歌ふより外に芸はなかつた。土曜日毎に一緒に草履穿きで比叡とか鞍馬とか愛宕とかを駆け廻つて、山河跋渉、浩然の気を養うたこと等、夫れから夫れへと恰も走馬燈の如くに脳裡に浮ぶ。[17]

このように牧野も水崎も「苦学生」であったが、それぞれの青春を謳歌しての同志社生活であった。ちなみに当時の同志社を描いた小説に、徳冨蘆花の『黒い眼と茶色の目』（『蘆花全集』一〇巻（蘆花全集刊行会、一九二八）がある。また、牧野は同志社時代から石井十次の岡山孤児院に対しても支援をしている。牧野の卒業前に五年継続して賛助員となって支援したことの礼を京都に来た石井から直接言われた。以後、石井と知己になった牧野は孤児院に対して支援を惜しまなかった。

②同志社時代に於ける牧野の論文―二つの弔文

牧野は同志社に入学し、当時の同志社の学生が中心に執筆していた『同志社文学』（『同志社文学会雑誌』等、幾度か改名あり）に三箇の小論を執筆している。また牧野が北海道から送った書簡（「牧野寅次君よりの来簡」）

も掲載されている。三箇の内、二箇は友人の追悼文であり、一個は当時の彼の思想が窺える興味ある小論である。まず弔文二つを紹介しておこう。

一つは「内藤一雄を悼む」[18]であり、一八歳で早世した内藤への細やかな友愛が追慕されている牧野二〇歳時の小論である。内藤は札幌の出身であるが、一八九一年七月二四日に死去した。牧野とは四月以来、同室の間柄であった。また新島八重と内藤の母とは親友の間柄であった。電報にて母親は六月初旬、札幌から京都に到着するが、「病勢は日を追ふて愈激しく毒膿を出す瘡口は早や十数ケ所となり衰弱益加はれり母君等は空しく手を束ねて変の来るを待つが如く医師は意外に長引くを奇めり」とある。

告別の為め病室を訪ふ氏が形容枯槁眼窪み肉落ちて口重し予を見て只首肯するのみ母君私かに声を震はし予に語りて「何れ是れで御別れになりましよう」と云ひ終りて紅涙数行滴々巾を湿ほす……略……嗚呼曾て同行を約して遂に果さゞる比叡愛宕の高峯と二ケ月間同室の好みを結びし第四寮下階東北の室とは予をして亡き友の風采を臆起せしむるの紀念とはなりぬ嗚呼天然と人工と何ぞ撰ばん願くは消え失する亡友の紀念をして一日も長く此の変遷極りなき世人の記憶中より留めしめよ。

そして「北海の浜と滋賀の里天地隔絶せる両個の青年が室を共にして数旬相交はる既に寄偶なり其病床に侍し同情同感を表し親しく相接す更に奇縁なり此の奇遇と此の奇縁あり而も今や復た百里を隔てゝ空しく其訃音に接し徒らに東方を望んで其最後に会せざる悲しむ噫　一雄氏父は薩摩の人母は会津の人北海道に成長し骨を京都に埋む行年十八歳」と早世した友を偲んでいる。

次に「長崎武之助君を悼む」[19]をみてみよう。長崎は一八六七（慶応三）年の生まれで高知県幡多郡佐賀村の出身。青年の頃、医業を志し後に、東上し陸軍教導団に入り、八八年、同団を卒業、近衛第三連隊付となった。その時にキリスト教信者となり、在隊中に新島のことを聞き、同志社入学を切望する。九二年に依願退職し、同年九月、同志社神学校（別科神学生）に入学した。牧野は「以来二ケ年間君が在校中如何に校事に尽瘁せしかは尚吾人の記憶に新たなる処なり」と回顧している。そして「去年六月十二日の午後なりき。例の如く予は君の指揮の下に兵式体操の日課を卒へ君と共に談朝鮮事件に及びし時、君は切りに征韓の途に就かん事を熱望し予は只管君が軍籍にあるを羨み、意気快然。図書館外心なく相一揖して分る。翌朝伝語あり曰く。長崎君昨夜非常召集の電報を受け今朝未明西に向つて発せり。忽卒の際親しく告別の暇なし」と。長崎は同志社で兵式体操を教えていた。しかし軍隊に復帰し清国草河口にて戦死してしまう。牧野にとって彼の死は晴天の霹靂であった。

君深く故新島先生愛国の至誠に感じ其謦咳に接せざるを以て終生の憾となせり。談会ま先生の事に及べば未だ曾て粛然として容を改めずんばあらず。君が来校以来種々の困難は相継て至り殆んど君が在校を妨げんとせしことありしも。君は万障を排して必ず我校に於て成業せん事を期し、常に「如何なることあるも同志社は離る能わず」と云はれしもの。果して何の感ずる処ありしか。

牧野は「嗚呼草河場。悲風粛々たる辺り勇魂何処にか吟ふ。『爾旅人よ行て故国の人に告げよ。国の律法に従ひて我死する』と。永く行人をして襟を湿さしむ」云々と記している。長崎の戦死は牧野とっても大きな傷心となった。「聊蕪か辞を綴りて勇魂を弔ふ。百感沸出文辞をなさず。君願くは来り享けよ」と弔文を結んでいる。

③「敢テ問フ同窓ノ諸君」について

牧野は一八八九（明治二二）年四月、一八歳の時、『同志社文学会雑誌』二一号に「敢テ問フ同窓ノ諸君」と題した文章を掲載する。その文頭に「敢テ問フ同窓ノ諸君我校創立以来我校特有物トモ誇ルベキ所謂元気ナルモノハ月ヲ経年ヲ重ヌルニ従ヒ恰モ朝露ノ命数ヲ取レルハ殆ンド覆フベカラザルノ事実ナリ」と現状を憂憤し、「元気回復ノ任ハ卿等ヲ除キテ他ニ其者一人アランヤ」と問題を投げかける。更に「敢テ問フ同朋諸君ヨ葡萄ノ樹ヨリ湧出スル所ノ生命ノ水ハ諸君ガ全体を涵養スルヤ諸君ニシテ是ノ事ナキカ諸君ハ憐レ果敢ナクモ枯死シタル枝葉タルヲ免レザルナリ看ヨ看ヨ彼ノ厳格ナル農夫ハ諸君ヲ収メ将ニ尽キザル火ニ投ゲ棄テントスルニアラズヤ」と、そして聖書のヨブの苦難の歴史とその生き様を例示し「敢テ問フ我ガ同窓ノ諸君ヨ卿等ハ果シテ凡テノ功名心利欲心ヲ棄テ、十字架ヲ取ルニ勇気アルカ凡テノ学識ト智力トヲ抛ツテ信仰ニ進ムノ覚悟アルカ」と問うのである。

人或ハ予ノ言ヲ尤ガメテ酔狂人ノ語トナスモノアランサレド怪ム勿レ宝ヲ持スル者ノ天国ニ入ルハ駱駝ノ針ノ穴ヲ通過スルヨリ尚難シトハ決シテ基督教ト世ノ文明ト一致セザルヲ示スノ語ニアラザルナリ物質上ノ文明外形的ノ開化ハ一トシテ直接ニ間接ニ財貨ノ力ヲ待タザルモノナシ財貨コソ実ニ第十九世紀ノ開明ヲ生ミ出シタルモノナラズヤ夫レ然リ然ルヲ何ガ故ニ之ヲ持スルモノハ神ノ国ニ進ミ難シトスルカ他ナシ人ハ二人ノ主ニ事フル事ヲ得ズ神ニ事ヘ又財貨ニ事フルコトヲ得ズ此ヲ尊ミ彼ヲ鄙シム可ケレバナリ諸君ノ中或ハ学者ヲ崇拝シ甘ンジテ智識ノ奴隷タルノ人ナキカ八百余名ノ学生中蓋シ其人少ナシトスベカラザルナリ我校元気ノ衰頽豈夫レ偶然ナランヤ

牧野は「吾人ガ基督教ヲ奉ズル所以ハ決シテ哲理深遠ナルガ故ニアラズシテ是ニ由テ吾人ノ品格ヲ養ナヒ吾人ノ生命ヲ得以テ真正ノ人間タラント欲スルニ外ナラザルナリ活ケル水活ケルパンヲ得ント欲スルニ外ナラザルナリ此ノ水ト此ノパントニ由テ生活スル者コソ真ニ我校特有ノ元気ニ由テ養成セラレシ者ト謂ツベキナリ敢テ問フ同窓ノ諸君ヨ卿等ハ是ノ元気ヲ得タル我校生徒ト自称スルヲ得ルカ」と更に問いを投げかける。

ここには、「品格ヲ養ヒ」「生命ヲ得」「真正ノ人間」たろうとする若き学徒牧野の情熱的な求道的態度が察知できよう。そして「聖経ニ曰ク若シ十人ノ義人アラバソドムゴモラノ罪悪ノ府モ滅亡セラルゝ事ナカルベシト嗚呼現今我校元気ノ衰退此ニ至レルハ抑モ何ノ故ゾヤ生徒ノ増加スルニ随ヒ之ヲ感化スルノ力希薄ニ渡ルヲ以テノ故ナルカ将タ又二百有余名ノ教会員中僅々十名ノ義人ナキニ由ルカ」、そして「嗚命全校ノ学生中誰レカ任ジテ我校ノ元気ヲ挽回スルモノゾ誰レカ熱心血涙ヲ流シテ我校ノ為ニ祈ルモノゾ敢テ問フ同窓ノ諸君諸君ハ自ラ信ジ自ラ任ズルコト能ハザルカ」と強い口調で論じている。そして「我校特有ノ元気」は「活ケル能力アル基督教ヲ実際ニ応用スル」ことにあると説くのである。ここには新島の「活けるキリスト教主義」という思念が意識されていたと思う。

もちろん牧野がこのような問いを他人に発するのは自己への問いかけでもあった。牧野は同志社普通学校の五年間、ここで主張した問いを自分の問題として生活していたと考えられる。こうして牧野は一八九二（明治二五）年六月、同志社普通学校を卒業することとなる。牧野は卒業後、熊本の東亜学館の教師として赴任した。一方、畏友大塚素は北海道の監獄教誨師の道を選んだ。

（三）同志社卒業後―熊本東亜学館教師と同志社予備校寮長

牧野の就く東亜学館とは如何なる学校であろうか。[20] 従来熊本にはジェーンズ率いる熊本洋学校があった。しかしこの学校の在学生であった徳富蘇峰、小崎弘道、海老名弾正、金森通倫ら学生は花岡山で信仰の証を誓う。そして彼等熊本バンドたちは、新島が設立した同志社英学校に転入する。その後、徳富蘇峰は一八八二（明治一五）年に大江義塾を創設した。しかしこの学校も八六年、蘇峰の東上によって閉鎖される。かくして熊本から洋学の場が消えることの危機感から翌年に熊本英学校が創設され、海老名弾正がその校長となった。そして八八年四月、正式に熊本英学校が認可、創設されることとなる。

その後、海老名が退職し、一八九一年一二月、学校は蔵原惟郭を招くこととなった。翌年一月、二学期始業式の際、蔵原の招聘記念における職員奥村禎次郎の演説が問題になる。いわゆる奥村禎次郎事件が起こる。[21] これは時まさしく東京に於ける内村鑑三不敬事件と並び称される不敬事件とされた。そして知事の英学校への弾圧があり、柏木義円、井上友次郎ら熊本英学校分離派が新しい学校を託麻郡大江村に家を借りて設立することとなった。これが東亜学館である。柏木は熊本から京都に帰り、この主任教員として牧野虎次が就任することとなる。牧野の就任を押したのは柏木であった。牧野は九二年九月から九三（明治二六）年七月、同志社に帰るまで一年間、東亜学館の教師として熊本にて起居した。[22] 一年契約の約束にしたがって九三年七月に京都に戻った。

同志社に戻った牧野は「予備校寮長兼教師となり傍ら同志社神学校に学ぶことゝなれり」（『牧野寿子小伝』二四頁）とある。そこで予備校で一年半、寮長をしながら、神学校で学びの道に復活した。約一年半の寮長時代については、彼の自伝や『針の穴から』にも、記述が見いだせない。『同志社文学』八六号（一八九五年三月二〇日）の「草津における送迎会」という記事には、二月一六日に予備校生徒一同が旧寮長牧野と新寮長の歓送迎会を開

催し、午前中は大津から船で琵琶湖を巡り甲板にて様々な余興が催され、「風興頗る壮快」とある。午後は草津養老亭にて送別の詞、歓迎の言、対する答辞等交々尽きず、「頗る盛会」であったと報じている。おそらく牧野もこうした後輩たちの言葉を胸に北海道に旅立ったと思われる。ちなみに同誌次号には二月二一日、牧野は神学研究会で「復活に関する思想の変遷」という演題で話し、二月二三日に北海道への出発の旨が報じられている。

三、監獄教誨師―「北海道バンド」の一員として

（一）監獄教誨師への覚悟―荒尾精の「石磯」

まず牧野が同志社を離れ北海道の教誨師として赴任していく時のエピソードを記しておこう。それは『針の穴から』にある「東方齋荒尾精先生」（四六～五二頁）という箇所である。牧野は荒尾を同志社での講演会講師として招聘したことによって荒尾と知己となり、多くの感化を受ける。「荒尾精先生を迎えて、大陸問題を前後三回に亙る大講演を承ったことは、長く忘れることが能ない」（四七頁）と記している。時代が日清戦争時であり、時局における荒尾の話は牧野の心にも響いた。荒尾は川上操六、福島安正、根津一らと共に陸軍参謀本部の四天王と呼ばれていた人物である。当時牧野は彼の話「諄々と東亜の形勢を説き、清国では曾国藩や李鴻章、韓国では金玉均や朴永孝などの人物評を「いずれも恰もご自分の掌を指す様に説き聞かされ、我等は活きた歴史を学ぶ気持ちで、いつも感嘆して居た」（四八頁）と回顧する。

その後、牧野は教誨師として渡道を決心し、荒尾にその件を打ち明けた。そして牧野は入信の動機や「最（い）と微（ちいさ）き者の一人を顧みることが大切ではないか」、滔々と二時間ほど教誨師として行くことを荒尾の前で説いた（五

〇頁）。荒尾は自分が大陸問題に従事するのが「天縁」で、牧野はキリストの伝道が「天縁」であると述べ、快く渡北を祝し、筆墨を取り出し「石磯」と大書し「明治乙未春牧野虎次君　立伝道之志　将赴北海道　特書為餞　東方齋」（五〇頁）と認め牧野に渡した。

荒尾は教誨師として対処する相手は学問や弁舌で得心する様な相手ではない。「君は一切の我をなげすてて、捨身になれ。石鹸が相手の垢を清めるのは消えて無くなるからだ。消えて無くなって終ったら、向うの垢はキレイに洗い落されるものと心得よ。俺が君の伝道事業を餞する微意を汲み取ってほしい」（五一頁）云々と言って額面を餞とした。爾来、牧野は「石磯」の額と荒尾の写真を終世、書斎に掲げていく。荒尾とは行く道、考え方は違っても己が天職に向けて進んでいくという互いの尊敬があった。[23]

このように牧野は一八九五（明治二八）年二月、寮長を辞し、同志社神学校を卒業し北海道十勝分監に赴任することとなる。おそらく留岡や阿部政恒、末吉保造、松尾音次郎、中江汪、水崎基一、大塚素ら多くの同志社卒業生が困難な教誨事業に携わっていたことを恐らく知っていたし、むしろ困難な事業ゆえ、キリスト者として、加えて新島の思想影響から牧野はそこに飛び込んでいった。ちなみに牧野の給料は二〇円から二五円程度であった。[24] 同志社時代に「天父を信じ、隣人を愛し」「最微者の一人に奉仕」することを教わった牧野もその仲間（「北海道バンド」）となる。

荒尾精書「石磯」　愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵

(二) 北海道十勝分監への赴任

さしあたり牧野の赴任先の十勝分監についてみておくことにしよう。北海道において、明治一〇年代から開拓に連動させて各地に集治監が相次いで設立された。まず一八八一年に樺戸に集治監が創設され、その後、空知、釧路、網走と集治監が創られ、多くの囚人たちが送られ、時には北海道開拓を名目に危険な外役労働に利用されたりした。

そうした中で一八九五（明治二八）年三月の内務省告示第四二号をもって十勝国河西郡帯広村に「十勝分監」として四月一日に開庁されることとなる。その経緯は八九（明治二二）年六月頃、時の空知集治監典獄渡辺惟精によって新建設地としてその地が候補に上ったが、諸事情により網走分監が先に創られ、十勝分監は見送られていた。その後一八九二（明示二五）年になって大井上輝前典獄の下で具体化していく。

> 廿五年中時ノ本監典獄大井上輝前十勝国ノ各郡を踏破シ、前渡辺空知集治監典獄ノ選定シタル河西郡帯広村ニ於テ新監建設地ヲト定シ、廿六七年度継続費ヲ以テ予算ヲ要求シ、廿六年度ヨリ起工スルコトトセリ、然ルニ当時ニ至ツテハ石狩十勝ノ両国ニ通スヘキ道路ナク、本監十勝ノ間道程数十里山川隔絶シ、本監ノ直轄ヲ以テシテハ工事ノ経営及其監督ノ如キ到底為シ得サルコトニ属ス、茲ヲ以テ其最近ナル釧路分監ニ一切之ヲ委嘱シ営造監督ノ任ニ当ラシム、而シテ釧路分監ハ其拘禁囚ヲ河西郡帯広村ニ分遣シ、既定ノ設計書ニ基キ、囚人ヲ使役シテ之ヲ直営セリ、此時ニ方リ分監長八田哉明非常ノ精励ヲ以テ之ニ従事シ、鋭意其竣功ヲ促カシ亦夕屢々実地ニ臨ミ指揮監督ヲ為シ、予期ノ如ク二十七年度ニ於テ全部ノ竣功ヲ告ケ、越テ二十八年四月一日ヲ以テ開庁セリ、[25]

牧野は二月末から北海道に赴任していたが、正式に開庁したのは四月からであった。この十勝分監は「農業監獄」を目ざし、樺戸とを結ぶ基点として位置していた。また同年七月五日の勅令第九八号の集治監官制の改正によって、一〇日より内務省の直轄となった為め「最早、道庁の手に委するの必要なきは、無論なり」（『大日本監獄協会雑誌』八六号、八五年七月）と北海道庁とは関係なくなる。こういう状況下で、牧野は十勝分監にて職務に就くことになった。[26]

牧野は『同志社文学』に北海道赴任当時の状況を「諸監獄諸集治監などを巡視して少なからざる感想を抱き申候宗教家教育家若しくは社会的問題を気に懸ける人々等は是非一考を煩はすべき事と存じ候兎に角社会水平線以下に堕落しをる同胞等のことに御座候間世人の注目を惹くこと少なく為めに度外視せられをる事と存候」[27]と忌憚なき感想を北辺の地より同志社文学会宛に認めている。続けて、

> さればかゝる事に従事する者は初めより「頭が挙らぬ仕事」と観念して真正に献身的の真精神を抱く事肝要に御座候勿論飽食暖衣の余地は無之候されど世の中には「頭が挙らぬ仕事」を好んで執る者も無用にはあらざるべし工匠の棄てたる石時に或は隅の首石ともなる事あるべしと独り自ら任じ自ら慰め而して又自ら励まし居候月に対すれば月と語り雪に対すれば雪と語り山川風月悉く我情を語るの友と致居候独り旅も随分面白きものに御座候就中面白きは各地に於ける同窓の旧友を訪ふたる事に御座候学校に居りし頃は多少の不平を懐きをりし人々も出でゝ四方に散ずれば何れも相国寺辺の楽天地を想ひ起さぬ人々はなく第一に問を受くるは同志社の近況に御座候願くは在校の諸同志幸に自愛自重深く自ら警戒せられん事を

と報じ、「今左に沿道各地に於ける同窓諸君の近況を報じ申候雑誌上にて他の諸兄に御披露披下候はゞ幸甚に存じ候勿論小生は列記の諸兄に悉く面会致せしには無之各地にて二三或は五六の友人より聞きたる処を聞くが侭に記しをきたる迄に御座候依て中には小生が曾て知り居らざる御名前も御座候京都より順道の次第に記せば」云々と伝えている。ここの「列記の諸兄」とは、例えば「監獄事業」の水崎基一、末吉保造、中江汪、「開墾事業」の塩見幸次郎、インマヌエル村の志方之善、丸山伝太郎らである。十勝分監の開庁が四月であったため、「独り旅も随分面白きものに御座候」と記しているように、牧野は監獄を訪い多くの人々に会い、とりわけ北海道の同志社卒業生の様子を調べ、京都に報告している。

(三) 牧野の『教誨叢書』と『獄事叢書』における論文

①『教誨叢書』掲載の論文

十勝分監に赴任した牧野は「同情会」が刊行していた『教誨叢書』に四編を執筆している。[28] その内、披見出来た三編を紹介し牧野の考え方をみておこう。それは「大塩平八郎」四六号（一八九五年一〇月）、「立ち向ふ人の心ぞ鏡なれ」四七号（九六年一月）、「橋のなかば」四八号（九六年四月）である。

まず、「大塩平八郎」は牧野が大阪に行く時、敬愛する伯父が大塩平八郎の江戸に遊学していた時の逸事を牧野に一つの教訓として語ったものである。牧野はそれを聞き感銘を受け、ずっと心に残っていた。それについての小論であり、それは天保時代の傑物たる大塩平八郎の江戸遊学時の逸話である。[29] 大塩は佐藤一斎の塾に入ったが、他の塾生と違い勉強に熱心であった。新参者に対して塾生たちが彼を呼び出し遊びに江戸の町に連れ出す。そして酒宴を催し最後に大塩はその席の費用を払わされる羽目になった。大塩は佐藤先生に自分の若気の至りに

よる酒興に至ったと報告し、先生に立て替えを懇願し、塾生たちに欺かれたことを一切言わなかった。そして国元より学資金到着後に恩借金を先生に返済した。ことの仔細は凡ての塾生の耳に伝わり遂に先生の耳にも入る。そして彼は年少にして塾頭になったという逸話である。「予は此の逸事談を思ひ起す毎にいつも自ら重ずるの英気を起さゞるを得ざるなり自重心とはかくの如きことならん」と記している。牧野の人生における処世術も、換言すれば伯父の卓越した脚色による逸話が結局、人生訓の成果として牧野に影響を与えたことになる。

次の「立ち向ふ人の心ぞ鏡なれ」は京都清水坂の階段の店頭に繋がれた数頭の猿と通行人の話である。居合わせた人は猿に手鏡を渡す。猿は己自身が映っていることが認識出来ず、鏡に向かって己や他の猿に対し敵対心をむき出しになる。この光景を多くの人が喜んでいる。牧野はその時は何も思わなかったが、後日「己が影を見て怒るもの独り猿のみに非るを思ふなり」と、そして「立ちむかふ人の心ぞ鏡なれ己がすがたを写してや見ん」という古歌を引用し、「誠に我等が日常交る所の人々は我が心の姿を写すべき真の鏡と称すべきなり」と論じ、「啻に人と接することのみならず我等が日常の所行も亦此類尠しとせず」と、我々が常に懐く感情でもあると自戒する。

我等若し日常接する親兄弟亦は朋友の中に己を憎むものありと思はゞ先づ我が心をさぐり見よ我果して彼等を憎く思ひをらずや、我が心の影法師が彼等に写りをるにはあらずや、我等若し又我が執る職業を厭ひ我が嗜めるものが欲くなることあれば幸に清水寺の猿の事を思ひ見よ我或は我心の影法師と角力取りをるにはあらずや

そして「世の中には己が影法師と見て泣いたり笑ふたり又は悲みたり狂ふたりする人々の多きは残念至極にあ

らずや、『立ち向ふ人の心ぞ鏡なれ』我が顔は鏡によりて写さるゝ如く我が心は立ち向ふ人の心に写さるゝものぞかし」と、誰もが持っている人の心理の在り様に言及している。これも自己への反省、戒めを含めた教誨説教であったかも知れない。

三つ目の「橋のなかば」は土佐教会赴任後に執筆されたものである。内容から教誨師を意識しての文章であろうか、布施矩道の道話から始まる。それはある旅人が住吉神社の反り橋を渡ろうとして、橋の中央まで来たが、橋の上より下りを見たとき恐怖の感に襲われ、元来た道を引き返したという逸話である。つまり中央まで登ればどちらに下るのも同じなのに、来た道を下るとは本当に心外のことであるとその行為を非難している。

此の時に当りて突然諸君の耳辺（みみ）に教ゆるものあり曰く「君が今日迄の所行は謬てる所多し先づ其大酒の癖を止めよ強情の念を絶てよ私利の欲を制せよ否此れよりも更に勝りて新たに生れ更（かわ）りし人となれ君が曾て自己を愛せし如く他人をも愛すべし更に一歩を進めて君が曾て肉体のこと世俗のことを思ひ煩ひし如くに以後霊魂のこと神聖のことに熱心なるべし君が今迄左に用ひ来りし力を右に転ぜよ旧きをすてゝ新たに生れ更りし人となるべし好機実に今日にあり」と此の時に当りて諸君は果して何を以て答へらゝか予は矢張りもと来し道へ引き帰へしたとの答あるべきか

「人間一生涯、何れの道行く処まで行かざるべからず尚反り橋の中央に立ちをる旅人は何れの道ドチラにか下らざるべからざるが如し只一つ考ふべきは前に進むか後に退くか進んで参詣の目的を達すべきか退きて今迄の労苦を無にすべきか覚悟の決め所は実に此処にあるなり」と覚悟の決め所をしっかりと自覚することの大切さを指

摘している。そして牧野は心の向け方一つであると説く。かくて「予は敢て同じ事を繰り返へさゞるべし只記憶せよ諸君は今橋の中央に立てり成程悔改めたる新しき人間となると云ふ前路を望めば少しは険呑らしく見えて下るに躊躇せらるゝ事もあるべしされど後に引き帰へすにも亦同じ嶮しき路を下らざるべからず嶮しをは同様なり前に進みて人生の目的を達するか後に退きて今迄の苦労を反古にするか只諸君の決心一つにあり只決心一つにありなり」と時を鑑みた勇断の大切さで締めくくっている。

これも内容的には囚徒に対して心がけ一つで良き道を選択することの教訓で、職を離れたとはいえ、彼らに対し悔過遷善のメッセージであったのだろう。

②『獄事叢書』の論文について

同情会のもう一つの雑誌「『獄事叢書』に眼を転じると、牧野が執筆したものは二三号（一八九六年二月）所収の「如何なる点にまで教育事業と観ぜらるゝか」という一篇のみである。これも辞職した後に執筆したものであるが、彼自身の監獄事業に対する提言が見受けられる。この論文の最初に第一四統計年鑑による重軽罪処刑人数（一七万五六一八人）、警察や裁判所、監獄職員の総数（五万〇六二六人）、そして監獄関係の総経費は一〇〇〇万円を超える金額が実態であるとする。この事業に対し政治家、教育家、宗教家のそれぞれの立場における活発な議論を切望している。また罪科学においては穿鑿考聱すべきでない、と指摘する。「罪囚とは何ぞや」「犯罪に至らしめたる其原因は何ぞや」「果たしてその原因を除去できるか」、そして「抑も又懲罰が罪囚に及ぼす其影響如何此実に当るの諸士が一日も忽にすべからざる最要問題に非ずや」と述べ、次のように論じている。「監獄とは何ぞや囚人が犯したる過去の失行に対して懲瑟の事を行ふ所なりとは唯其所務の半面を述ぶるに過ぎざるなり人世に過去の歴史と将来の希望とを有するが如く監獄も亦将来に於ける責任を有す刑の執行場とは単に過去の

失行を咎むる所以にして此只監獄要務の第一義のみ其第二義は即ち監獄は在監囚人が放免後に於ける準備の場所たらしめざるべからざる事に非ずや」と。そして「彼れ猪衣を纏ひ鉄鎖に縛せられ身は囹圄の中に坤吟する悪漢無頼の徒と雖も同じく此れ『人の子』に非ずや若し此を処するに『人の子』の道を以てすれば彼等も亦『人の子』たる改悛をなすべきなり」と、世間より排斥せられた幽囚の徒に対し同じ「人の子」として向きあっていく姿勢を示す。そして「過ぎし犯罪の懲罰と世人を警醒する為めの防遏と而して囚者を改悛に導くべく感化と此三者は遇囚上の要素として共に其一をも欠くべからざるなり」と指摘する。

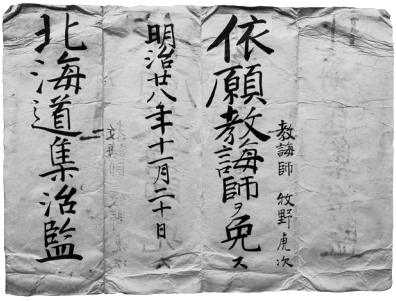
したがって「然り監獄事業は別言すれば実に悪漢を薫陶する教育事業に外ならず而かも教育上の至難にして又至緊なるものなり。吾人が希望する所は中央政府は勿論当局者に於て此司獄の大任を観るに教育の方面よりせられん事にあるなり」と「監獄事業は教育事業」であると主唱する。

最後にジョン・ハワードを取り上げている。彼が各国における獄制調査の途、イタリア・ベニスにおいて伝染病隔離の避病院に果敢に入り、惨状の現場に行ったエピソードである。その場で本人も感染し四〇日間罹患しながらも、その報告をしたという、その精神を示し「身囚者感化の要衝に当り邦家の為め正義の為め同胞の為め悪漢薫陶の大任にあるもの宜く此の赤誠あるを要す男児生れて司獄の任を享く又偉ならずや」と結んでいる。このハワードの獄制改革に取り組む精神こそ、牧野が見習うべき生き方であったと思われる。

（四）連袂辞職をめぐって

北海道集治監の官制改革に伴い、また大井上は幌内炭鉱等の外役労働（囚人労働）を廃止したことや不敬事件の風評も重なり、大井上輝前典獄は遂に非職に追い込まれることとなる。彼に代わって石澤謹吾が典獄に就くこ

とになった。かくて石澤は各集治監に仏教系教誨師を採用していった。この結果、集治監の現場では教誨方法の軋轢、混乱を来たすこととなり、キリスト教教誨師たちの一貫した方法は頓挫することになる。牧野は一一月二〇日に辞職する。それに関する資料が同志社社史資料センターの所蔵されており、「教誨師牧野虎次　依願教誨師ヲ免ス　明治二八年十一月二十日　北海道集治監」と墨筆にて記されている（写真参照）。その後、牧野は連名で九五（明治二八）年一一月末、原胤昭、水崎基一、末吉保造、山本徳尚の五人は共に趣意書をもって連袂辞職とした。[30] 米国にいた留岡はこのことを原の書簡で知り、日記に「此れでスッパリ北海道集治監はきりすと教主義を放逐せり。可憐なるは七千有余なる罪囚なり。いざ此よりは願連なる司獄官の頭上に一撃を加ふるの時来れり真正の言論自由は吾人の頭上にありと云ふ可し」と憤怒を認めている（『留岡幸助日記』一巻、五二五頁）。



〔辞令〕（牧野虎次教誨師を免ず）
資料室②-1020(4)-3
同志社社史資料センター所蔵

辞職した牧野は、九六年年一月、当時米国に遊学していた留岡に非行少年の感化事業の必要性とそれに尽瘁する覚悟を書簡を通して披瀝し、次のように認めている。

小生自身の考を申上くれば、前述の通り、身は畢生宗教界と定めをり申候得共、向後の宗教家は今一層注意して、ソーシアル・クエスチョンに没頭すべき必要ありと信じをり候。眼を東亜全体の大勢に注ぎ、文明日進の潮流に鑑み、モット社会実際の生活に実行ある様に注意せねばならぬ事と存じ居候間、不良少年の感化

等は現今の宗教々育家が尤も注意留心すべき大問題であると信んじ居候。且つ時勢の上より論ずるも現今我邦社会のリードより云ふも、又は世人の眼の注ぎをる点より云ふも、此事業は是非共我党の人々が大に勉むべき事と信じ候。翻て小生一身の上より云ふも、少年を取扱ふ事は尤も小生のインタレストの存する所に有之候間、茲に小生も志を決して右事業に尽瘁すべき覚悟を生し申候[31]

もちろん、かかる考え方は他のキリスト教教誨師とも共有していたと思われる。生江孝之が後に「北海道バンド」と称したように、牧野を含めた彼らの功績は、キリスト教史のみならず、行刑史上からも高く評価されなければならない。そこには多くの同志社出身者がいたのである[32]。

このように、北海道での事業は一年にも満たなかったが、牧野は集治監において囚人たちの教誨という事業につき貴重な体験をした。もちろん在任期間の長短がその意義を決めるるのではなくて、体験した内容の質が大切である。「同心協力一方に於ては精神界の革命軍を以て自ら期し、一方に於てはプリヅン・ウヲーク革命軍の急先鋒を以て自ら任じ、俗吏輩には感化の何たるを知らしめ、教会の人々には活動の何たるを知らしめ、進んでは邦家人心の革新を期し、退ひては同志諸友の団結を図り、以て幾分なりとも我党の本色を天下に発表する事を得は豈又快ならずや[33]」云々と「プリヅン・ウヲークの革命軍」の急先鋒を自任し、真の宗教家たらんとの覚悟を持つに至った。この貴重な体験こそ、「北海道バンド」のバンドたる所以である。

結びに代えて―牧野のその後

教誨師を連袂辞職した牧野はその後、如何なる人生を歩んでいくのであろうか。当初、彼が就いたのは、一八九六（明治二九）年二月から土佐教会の伝道師であった[34]。三年務めた後、九九年七月渡米し、同志社在学中から抱懐していたイェール大学へ留学する。三年間の留学で同大学からB・Dの学位を受け、一九〇二年一一月帰国後、『基督教世界』（週刊）の編集主任となる。そして〇三年一一月から京都四条教会で牧師職につく。翌年、宮川経輝牧師より按手礼を受け、『基督の聖訓』という著書を宮川と共著として出版している。牧野はその前篇「基督の人訓」を担当しており、小著であるが、牧野のキリスト教観や人生観を知る上で貴重である。四条教会での牧会生活は一九一六（大正五）年一月まで一三年間続いた。一五年一月、日本基督教組合教会本部総幹事等を歴任し、一九年四月内務省嘱託となっている。そして二二（大正一一）年五月、親友大塚素の死去に伴い、その後任として南満州鉄道会社社会課長（後に社長室審査役）につき、「満州」に赴く。その後、二五年五月、大阪府嘱託となり、大阪の社会事業、とりわけ方面委員制度の発展に寄与した。昭和に入り、一九三三（昭和八）年五月、留岡幸助に代わり、家庭学校校長職（兼理事長）につく。同年『留岡幸助君古稀記念集』を編集、出版した。三八年から同志社総長事務取扱につき、後に総長となり、戦後を迎えることとなる。

戦後は一九四七（昭和二二）年七月、京都府顧問、京都府社会事業協会会長、都ホテル取締役（五五年まで）、京都府教育委員、京都市社会福祉委員会長、京都府社会福祉審議会長等を歴任し、五二年には藍綬褒章を受領した。また五三年五月からはハワイマキキ聖城基督教会牧師（五四年七月帰国）。翌年京都市名誉市民に推挙され、翌五五年からは米国シカゴ基督組合教会牧師（五七年一一月帰国）、五八年三月に同志社大学より名誉文化博士

号を受領した。そして、六四年二月一日、九三歳でもって天に召された。牧野は以上のように、同志社に入学後、キリスト教に入信し、新島襄の薫陶と思想的影響を受け、社会事業界、キリスト教界、教育の世界に身を挺し、戦後にかけ長い人生を送った数少ない同志社人の一人であった。

従来、この教誨師時代の牧野についての研究は皆無で、その生活や業務実態は不明のままであった。この論文では牧野の青春時代、同志社時代から、とりわけ北海道の十勝分監の教誨師に就き、該地での彼の実像をかなり明らかにできた。そして彼自身、この時代を先に引用した書簡中「向後の宗教家は今一層注意して、ソーシャル・クエスチョンに没頭すべき必要ありと信じをり候」と表現しているように貴重な経験であり、今後の彼の長い人生の指針となり、意義ある経験であったと思われる。彼は『針の穴から』という自伝を残したが、その晩年、牧野自ら「我等人間は未完成であるべきだ。未完成であればこそ生きて居るのではないか」、即ち「未完成の解決」（『針の穴から』（一四三～一四四頁）という人生哲学に辿りついているのも、真のキリスト教徒としての道を求めた証左ではなかったか。牧野の生涯については後日の課題とし、教誨師時代の牧野を描くという所期の目的を達した今、一先ず擱筆する。

（注）

（1）同志社々史々料編集所編『同志社九十年小史』（同志社、一九六五）五五七頁。

（2）留岡幸助日記編集委員会編『留岡幸助日記』第一巻（矯正協会、一九七九）六一六頁。牧野の書簡の文頭は以下のようである。短い教誨師生活であったが、「身は畢生宗教界と定めをり申候得共、向後の宗教家は今一層注意して、ソーシャル・クエスチョンに没頭すべき必要ありと信じをり候」と宗教界で生きていく覚悟、そして少年感化事業への視点、アジアや文明への関心を吐露している。

（3）例えば重松一義編著『北海道行刑史』（図譜出版、一九七〇）において、また高塩博・中山光勝編『北海道集治監論考』（弘文堂、一九九七）は牧野の赴任した十勝分監の歴史を、そして三吉明は『北海道社会事業史研究』（敬文館出版部、一九六九）で集治監での監獄改良や教誨事業につき論究している。更に小池喜孝の『鎖塚』（現代史資料センター出版会、一九七三）は北海道バンドの業績について高く評価し、牧野たちキリスト教教誨師の動向にも触れている。また最近の研究として赤司友徳『監獄の時代』（九州大学出版会、二〇二〇）においても北海道バンドの一員としての牧野の名前が記され、彼らは「監獄改良のため、人道主義的な立場から献身的に努力し『只管に囚徒の友たらんことを期』し『平民や貧民の友となる仕事を望』み『生命賭けで真剣に』職務を行った」（二二一頁）と評価されている。

（4）他に社会事業史の観点から竹中勝男の『日本基督教社会事業史』（中央社会事業協会社会事業研究所、一九四〇）や『福音の社会的行者』（日本組合基督教会事務所、一九三七）があるが、牧野について詳しく論じたものではない。また熊谷正吉『樺戸監獄』（北海道新聞社、一九九二）において、キリスト教教誨師をあげ、「この教誨師の中に同志社第十一代総長となった牧野虎次、社会事業家として有名な原胤昭、同じく北海道の遠軽に家庭学校を創立した留岡幸助らがいたことに注意したい」（八四頁）と記している。

（5）北海道集治監や行刑関係の著作として、先にあげた重松の著作の他に寺本界雄『樺戸監獄史話』（樺戸郡月形町役場、一九五〇）刑務協会編『日本近世行刑史稿』下巻（矯正協会、一九七四）等がある。また彼の関係人物として親友であった大塚素については「大塚素遺稿」編纂委員編『大塚素遺稿』（一九二三）がある。その他、牧野の同時代を考察する上で、二井仁美『留岡幸助と家庭学校』（不二出版、二〇一〇）、片岡優子『原胤昭の研究』（関西学院大学出版会、二〇一一）、そして拙著『留岡幸助の研究』（不二出版、一九九八）等も参看した。

（6）牧野虎次『牧野寿子小伝』（出版社不明、一九二七）四頁。この著の「緒言」において牧野は「寿子三回忌の際に、慈母と愛児とを偲びて、不肖なる小生が、満蒙旅行中に呵筆せしものなり」と記している。

（7）同右、一四～一五頁。以下、この著『牧野寿子小伝』には母寿子の家庭に為に尽力した美談が多く語れている。

（8）『針の穴から』（牧野虎次先生米寿記念会、一九五九）五頁。この著は牧野が八八歳を迎え、その記念会が開催され、牧野自身が生涯をふり返ったものである。「針の穴」という言葉は聖書の「金持ちが天国に行くには、ラクダが針の穴を通るよりも難しい」という箇所を想起させる（後述する牧野の論文「敢テ問フ同窓ノ諸君」も参照）。

（9）同右、一二頁。ちなみに彼の母校、朝陽学校の本館が、大正期に相国寺に寄贈され、林光院の本坊となった。牧野が在学中にいた寄宿舎東寮とは竹藪続きの隣であった。牧野にとって二つの母校が隣り合わせとなったことに感謝せずに居られない、と記している（同、七頁）。

（10）『新島襄全集』第一巻（同朋舎出版、一九八三）一三〇～一四一頁参照、引用は一四〇頁。

（11）例えば徳富蘇峰は『国民之友』一七号（一八八八年三月）に「福沢諭吉君と新島襄君」を掲載し、「泰西表面の文明たる物質的の知識は福沢君に」、「泰西裏面の文明たる精神的の道徳は新島君に於て案内せられる」と表現している。

（12）『復刊人道』四六号（一九三七年三月一五日）。また戦時中においても「日本基督教と新島襄先生」『基督教研究』二〇巻三号（一九四三年七月三〇日）では戦時の色濃い中、新島の国家観や戦時を意識しながら新島について語っている。

（13）『復刊人道』三三号（一九三六年二月一五日）収載の「新島先生の記念日に際し入信当時を偲ぶ」という論文。

（14）牧野は「新島先生が同志社大学創立趣旨書を天下に発表せられた時、先生の膝下にある学生が率先寄附金を申出たはよいが、僕の精一杯の寄附額は、驚く勿れ金一円二十銭也、それを月々十銭づゝ割払ひの月賦で申込んだのである」（『故水崎基一先生追悼』浅野綜合中学校、一九三八、一一八頁）と回顧しているが、当時の学生が無理してでも新島の構想に応えて協力していることが窺える。

（15）牧野は当時を「先生の霊柩をかついで若王子山頭に登つたその翌朝、自分は独り馳せて加茂の丘上に登り先生愛読の聖句を読み、小松原の間に跪き、私かに誓ふ処があつた」（『復刊人道』三三号）と述懐している。

（16）『人道』一八三号（一九二〇年九月一五日）。大塚素については、拙著『キリスト教社会福祉思想史の研究』（不二出版、一九九四）収載の一章二節「大塚素の生涯と思想」を参看されたい。『針の穴から』でも「大塚素の『友愛物語』」（六七～七四頁）として、大塚を偲んでいる。

（17）前掲『追悼』一一七頁。水崎については拙稿「水崎基一の研究―『北海道バンド』の一員として」（『キリスト教社会問題研究』七〇号を参看されたい）。また牧野の後輩に山室軍平がいるが、山室との出会いも『針の穴から』において「山室軍平が十八才にして始めて同志社予備校の門をくぐった時、私は門前の受付で『軍（いくさ）平（たいらぐ）です』との名乗を聴いた」（七四頁）と記され、以降、半世紀の間、山室とは渝らない友情が続いたとしている。

（18）『同志社文学』四五号（一八九一年八月一五日）。

(19)『同志社文学』八四号（一八九五年一月二三日）。長崎についての消息については『基督教新聞』六〇〇号（一八九五年一月二五日）でも二つ報じられている。一つは「同志社通信」欄に、「故長崎武之助氏」として別科神学生陸軍歩兵少尉長を追悼するため、一月一八日に同窓の学生が集まり「沈痛悲壮なる追悼会」が開催されたことの報告と彼の小伝、そして追悼文が掲載されている。二つ目のものは羽田浪之紹の「長崎武之助君を悼む」という追悼文である。同志社にとっても彼の死が同じ同窓生でクリスチャンとして慕われていた長崎という人物への哀悼が十分窺えるものである。

(20) 熊本東亜学館のことについては、茂義樹「熊本英学校事件をめぐって」『キリスト教社会問題研究』三七号（一九八九年三月）を主に参照した。

(21) 奥村事件については小股憲明『明治期における不敬事件の研究』（思文閣出版、二〇一〇）収載の「明治二五年（一八九二）一月　熊本英学校教員奥村貞次郎の『眼中無国家』事件」（四三〇頁）、井上哲次郎『教育ト宗教ノ衝突』（敬業社、一八九三）等参照。

(22) 前掲書『牧野寿子小伝』によれば、牧野の熊本東亜学館赴任は、一年の約束で英語、数学等の教師というものであった（二四頁）。

(23) この荒尾の書につき、北海道集治監勤務中、たまたま彼の官舎で類焼の火災が発生したが、その時「私は屋根が焼けている官舎に飛び込み、荒尾先生から戴いた『石磯の額』と、机の上にあった洗礼を受けた時の記念のバイブルとを、咄嗟の間に抱えて飛び出した」（『牧野虎次先生自叙伝』二七頁）と回顧しており、如何に彼がこの書の持つ意味を大切にしていたかが窺われる。ちなみにこの書は牧野が亡くなった時、牧野家から東亜同文書院同窓会組織「滬友会」に寄贈され、現在、愛知大学東亜同文書院大学記念センターのコレクションの一つとなっている。

(24) 教誨師牧野の給料は七月付け二五円、九月付けで二〇円という北海道監獄の史料が残されている（同志社社史資料センター）。二ケ月で給料が五円の差額がある。

(25)「集治監沿革略史」『北海道集治監論考』（弘文堂、一九九七）三〇二～三〇三頁。ちなみに『監獄協会雑誌』八二号（一八九五年四月）にも「北海道の新築集治監」（十勝分館の開庁）として樺戸本館のほか空知、釧路、網走に分監があるが「今、又、十勝国河西郡下帯広村に、分監を新設せられ、来る四月一日より、開庁せらるゝ筈なり」と報じられている。

(26)『近藤賢二翁追懐録』（一九四九）によれば、牧野は「翌年の明治二八年春から秋にかけて、僕は分監教誨師として赴任し、そ

の官舎に同窓の友新田義正と二人で、自炊生活を営んだ」（一七頁）と記している。

(27)『同志社文学』八七号（一八九五年四月二〇日）

(28) 一八九五年八月刊行の『教誨叢書』四四号に「身を捨てこそ浮ふ瀬もあれ」という論文であるが未見である。これについては他の『教誨叢書』の記事からタイトルを確認した。

(29) ちなみにこの挿話に出てくる大塩が佐藤の塾生であったということは、疑問が残る。例えば宮城公子『大塩平八郎』（朝日新聞社、一九七七）によれば「大阪町奉行与力隠居の彼は、勿論一斎とは一面識もない」（三頁）とあり、この挿話は伯父の思い違い、又は作為的な作り話か、牧野の思い違いかであろう。ただ挿話の真偽はともあれ、感動し思い出として残している牧野が、それを一つの教訓としていることは揺るぎない事実である。

(30) その趣意書には「道義教誨主義を採用せられざりし事」、「作業経済に偏重して感化教誨に重きを置れざる事」、「教誨師としては幾宗教の人物を並用すべきものにあらざる事」の三つの理由を挙げられている（『監獄雑誌』六―一二、一八九五年一二月）。この趣意書の日付は「十二月」となっている。「連袂辞職」の詳細については、拙著『留岡幸助の研究』（不二出版、一九九九）の「連袂辞職をめぐって」（一二六～一三五頁）を参看されたい。ただ、連袂辞職と言っても、それ以前に牧野や水崎は一一月二〇日に退職しており、中心人物の原が一番遅く、彼の退職した二六日か一一月末を以て連袂辞職したと叙述されてきた経緯もある。ちなみに教誨百年編纂委員会篇『教誨百年』上（真宗大谷派本願寺、一九七三）によれば、他の教誨師末吉保造は一一月二二日、山本徳尚は一一月一六日に退職している。

(31)『留岡幸助日記』一巻、六一六頁。留岡はこの書簡の末尾に、一八九六（明治二九）年二月一四日に昆加留土（コンコルド）に着したこと、加えてこの書簡は断片にすぎないことを断っている。

(32) 戦後ではあるが、当時のことを牧野は「北海道監獄教誨師」に尽瘁した思い出（「北海道に於る同志社組」）として「我等少数同志は、北海の陬に立籠り、無辜の可憐徒や、無学の小作農民等に伍して、道を説き、教を語りて、各自の使命遂行を念願して居たのである。憚り乍ら先師新島襄の衣鉢は、こゝに伝って居るぞとの抱負と気魄とは、此等少数同志の聊か誇る処であつた」『近藤賢二翁追懐録』（一八頁）と回顧している。この北海道にかける気概に新島の影響が感じられ、教誨師たちの渡道の動機にもそれが感じられる。

(33)『留岡幸助日記』一巻、六一六頁。また集治監には重い罪を犯した囚徒も多数いたが、牧野は教誨を振り返り、「私は十勝分監

に於て囚徒一人々々教誨室に呼び出して、個人教誨につとめたのであったが、考えれば考える程、人一人と云うものは、直ぐに一国の運命にも関係するような重大な位置をしめて居るものだと思わずには居られぬ。人間と云うものは、掘り下げれば掘り下げる程社会全体や一国の運命をも左右するものである事を泌々を考えさせられた」（『牧野虎次先生自叙伝』二六頁）と述懐している。

（34）牧野は高知に赴任し、立志社関係の人たちと「獄制問題などを議論して居た」その頃、板垣退助が内相になり、予てから議論していた理想を実現すべき運動に取りかかることとなった。ちょうど坂本直寛が牧野を訪れ「予ての宿論たる監獄改良意見を即時起草したらば、欣んで之を板垣内相に伝達すべしとの旨を語られた。自分は坂本氏の厚意に感じ即夜徹夜して意見書一篇を認め、坂本氏を経て内相に建白した」（同志社社史資料室編『追悼集Ⅴ同志社人物誌　昭和七年～昭和九年』二八四頁）という思い出を書いている。しかしこの建白書については未見であり、今後の課題とする。

※謝辞

この論文を作成するにあたって、愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵になる貴重な荒尾精書「石磯」の写真掲載を許可頂き感謝申しあげます。